

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ（留学目的）		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
99-008	カンボジア社会経済論 プノンペン シクロ産業従事者の社会		
	カンボジア	プノンペン大学	1999.10 ~ 2001.9
	寺内 こずえ	東京外国語大学大学院	院生修士

研究テーマ（留学目的）の説明（助成決定時のテーマ。文責は本人）

私の研究分野は、カンボジア社会経済である。具体的には、カンボジアに住む人々の内的な意味社会に焦点を当て、そこから、彼らの社会・経験を解釈する新たな仮説を形成することを目的としている。なぜ、そのようなアプローチが必要とされ、新たな方法として意味を見出すかを説明したい。

カンボジアに住む人々を対象としたフィールド調査は、以下のようなものがある。調査テーマから見ると、1970年代以前では、農村調査、華人調査、1980年代以降のテーマとしては、ポル・ポト時代及びその影響の検証、援助施行のための実務調査、3970年代以前の研究者などによる農村調査、華人調査、文化人類学的調査（宗教、儀礼など）である。そのような調査を、カンボジアに住む人々に対する描き方から分類すると、以下のように分けられるだろう。「語られる」人々と「語る」人々である。「語られる人々」とは農民としてのカンボジア人である。「農民」はカンボジア社会の主要構成員とされ、「飢えることのない」「安楽で変化の少ない」社会に生きる人々として、マスとして捉えられ、個人の姿が現れてくることがない。「語る」人々とは「被害者」としてのカンボジア人である。アメリカの爆撃の「ポル・ポト占有地域」の「虐殺」、「難民」、「貧困者」としての、つまり「政治戦争」に翻弄される「被害者」としてのカンボジアの人々である。調査者たちは、「世界へのメッセージ」として、政治的色彩を帯びたものとして、「被害者」の人々の声を出版する。個人の姿を見せなかったカンボジア人が、突如として、個々人が個々人の生活・人生を語り始める。上記のような枠組みの調査や研究は、その必然としての限界を持つのではないだろうか。まず個人の農民の不在であり、そして「被害者」としてのレッテルをはみ出すものが、調査・研究者の対象に入らないという限界である。

今回、調査を行う目的は、こちらから持ちこんだ枠組み・視点から、人々の社会を記述するのではなく、上述の2つの枠組みを超えて、ここの今を生きる人々の日常生活、意味社会に接近することである。具体的な対象は、シクロー従事者を対象として行うが、彼らをたんに、貧困者、援助対象者、フォーマル部門への就業までの暫定的な従業者、途上国に残存する伝統的運輸部門への従業者といった、彼らを知るよしもない、こちらから与えたカテゴリーから自由にし、今都市に生きる主体としての彼らの生活・社会・意識・価値に近づくことである。そして、将来的に、彼らの現実により近づいた、なんらかの仮説を導き出す為の、仮説発見のための調査としてこの調査を位置付けたい。

成果報告書

2001年9月26日 寺内こずえ
助成番号:99-008
留学期間:1999年10月～2001年9月
留学先国名:カンボジア王国
留学先機関名:王立プノンペン大学
社会人文科学部歴史学科

- I 留学期間中活動報告
- II 調査研究成果
- III 今後の活動予定
- IV 2年間の留学を終えて

I 留学期間中活動報告

留学期間中活動は以下の通り。

<授業聴講、個人チューターレッスン>

- ①1999年11月～2000年6月 王立プノンペン大学社会人文科学部歴史学科授業聴講
- ②1999年11月～2001年9月 王立プノンペン大学社会人文科学部文学部、及び、個人教師によるクメール語個人レッスン

<調査研究>

- ③2000年5月～2001年9月 プノンペン市シクロー蹴りを対象とした聞き取り調査
 - 2000年5月～7月シクロー蹴りを対象とした調査許可取得手続き、予備調査
 - 2000年7月～2001年6月 シクロー蹴り本調査(調査許可期間)
 - 2001年8月～2001年9月 シクロー蹴り補足調査
- ④2000年6月～2001年9月 ジム・ライさんへの個人史聞き取り調査

—詳細—

① 王立プノンペン大学歴史学科での授業は、本学生と同じ授業を聴講した。歴史学科は、大学の事情により、開講授業科目が少ないため、学年編入とはせず、1年生～4年生までの全ての授業で、私の研究テーマに関わる授業項目を、受講することにした。一般学生と共に授業を聴講することは、以下のような点で有意義であった。まず、自分のクメール語能力のレベルを確認することができ、クメール語学習のプランをたてる上で、良い目安となったこと。第2に同じ世代の友人を得ることができ、カンボジア生活を始めたばかりの私にとり、彼らは、学校生活のルールや生活習慣を教えてくれる

身近な先生となり、またそれぞれの家庭に招待してもらい、ホームステイ先の家庭以外に触れる良い機会を得たこと。第3には、「カンボジア、クメールの歴史」というテーマについて、また、「学問」などの概念について、大学での教官の指導方法、学生の授業態度や質問内容を、同じ教室で、1学生として、観察することができたことである。このことは、授業内容よりも大きな勉強、思索の機会となった。

指導教官、歴史学部長イウ・チャン教官には、授業のアレンジや理解度の確認、また、調査研究プランについてアドバイスなどの指導を受けた。イウ・チャン教官の指導によって、シクロー蹴りの調査について、必要な調査許可、及び、調査手続きを知り、早期に調査許可を各機関から得ることができた。また、調査許可取得のための申請書類は、受け入れ期間である、王立プノンペン大学学長経由で提出することができた。イウ・チャン教官、プット・チョムナーン学長からは、公式書簡を準備していただき、多大なご尽力を頂いた。調査許可が下りるまでの間は、イウ・チャン教官の紹介により、国立文書館でも、文献調査を行うことができた。現在に焦点をあてていた調査計画の外にあった、シクロー（蹴り）の歴史的経緯へ眼を通す必要を指摘して頂いたことにも感謝している。

一般授業の聴講は、1年間で修了し、2年目は聴講しなかった。理由として、開講授業科目が1年目とほぼ同じであったこと、そして、シクロー蹴りの調査に日中の時間をあてるためである。ただし、必要な助言やクメール語授業は継続して受けた。

②クメール語の授業は、2年間、日曜日以外のほぼ毎日、個人レッスンの形で受けた。王立プノンペン大学では、外国人向けの集中クメール語講座も開設されているが、私が日本でクメール語を履修済みであり、私が特に必要とした発音矯正などのためには、個人レッスンがより良い効果を出すとの判断による。個人レッスンは、王立プノンペン大学文学部長オック・チュオン教官と、ジム・ライさんをお願いした。留学中の目的であるシクロー蹴りを対象とした聞き取り調査に備え、聞き取り、はっきりとした発音の訓練が必要であった。日本語に比べ母音数が多いクメール語、特に、スペルとは異なる発音をする口語クメール語の聞き取りは、主に文字でクメール語を学んでいた私は苦手とするところであった。2教官には、発音矯正と、口語クメール語の教授をまずお願いした。特に、ジム・ライさんは、帰国直前まで、かなりの忍耐を要する発音矯正に、毎日労を惜しまず、根気強く付き合ってくださいました。またクメール語学習以外にも、この2教官は、私の質問にも丁寧に応対くださり、クメールの風習や事件などにも詳細な解説を頂いた。

②シクロー蹴りを対象とした調査は、主に以下のような活動を行った。

2000年5月～6月は、調査許可申請書類作成にあたった。調査許可申請は、所属先である王立プノンペン大学歴史学科長、王立プノンペン大学学部長経由、関連管轄諸機関宛となり、各段階で1週間～2週間ほどの時間がかかった。また、この調査許可申請には、調査計画と目的、責任所在を明確にした覚書をクメール語で作成し、提出した。調査許可は、プノンペン特別行政市からおり、調査許可期間は、2000年7月～2001年6月までの1年間とされた。調査許可内容は、シクロー蹴り、シクロー貸出業者、シクロー関連諸機関役人へのインタビュー、資料収集とされた。調査許可の発行条件として、プノンペン市下位行政区（7区）とプノンペン公共事業・交通局からの承認が必要とのことであった。これは、個人として各区役所、同局を訪問し、口頭または書面で

許可を頂くことができた。また同区役所、同局では、シクロー関連の統計書、シクロー貸出業者の住所録を入手し、また、担当役人へのインタビューを行った。

調査許可を全て得るまでの間、主にフランス植民地時代の資料を所蔵している国立文章館に通い、シクロー登場の経緯や関連資料を探す文献資料を行った。

また、予備調査として、カンボジアのローカルNGO、Urban Resource Centre Phnom Penh が、外国語などの学習、自由な水浴びなどの福利厚生、貯蓄プログラムの利用のために、シクロー蹴りに限り、場所を解放しているシクロー・センターに通い、シクロー蹴りとの交流を始めた。

2000年7月8月は、シクロー貸出業者への調査を行った。各区役所で得た名簿をもとに、ほぼ全数訪問を行ったが、シクロー業廃業や引越し、多忙などを理由として調査が行えなかったことなどにより、実施件数は限られた。20数軒の調査ではあったが、1980年以降のシクロー業開業から現在までの変移を聞き取ることができ、その後のシクロー蹴りへの個人史などの聞き取りの際、聞き取り内容の理解を助けた。この調査では、王立プノンペン芸術大学考古学部に通う友人に、アシスタントとして調査に同行してもらった。

2000年9月～11月は、ほぼ毎日、シクローセンターに通い、シクロー蹴りとの交流、自由対話、聞き取りを行った。9月以降の調査は、一人で行った。クメール語の聞き取りがなんとか1人でも可能になったことと、アシスタントとして同行してくれた友人の授業が始まったことによる。この3ヶ月間のシクロー蹴りの方々と私の関係性の変化はダイナミックであった。現場にいたことができる喜びと苦渋を強く感じる日々であった。

2000年12月は、話を聞くシクロー蹴りの幅を増やすため、また先行研究の検討のため、路上、市場などで、質問票を用いた調査を行った。この調査には、身の安全の保全と、私が苦手とする固有名詞の書き取りのため、シクロー蹴りの中から希望者を募り、調査にアシスタントとして同行してもらった。この2ヶ月もシクローセンターへは通い続けた。

2002年1月～9月までは、病気の時を除き、シクローセンターにはほぼ毎日通い、聞き取り調査を継続し、数人のシクロー蹴りの田舎にも招待され、訪問した。この頃には、継続して接触しているシクロー蹴りの方々との関係の深化や日常化を感じることができた。この日常化は良い面も悪い面もあるのだが、長期の調査でしか得られぬものであり、もっとも、長期継続調査の価値を考えさせられるときであった。最後の1ヶ月は、帰国の準備にあてられた。

④ ジム・ライさんからの個人史聞き取り調査

ジム・ライさんには、上述のようにクメール語を教えていただいていたが、その間、彼女が頻繁に彼女の経験を交え、説明して下さるのを聞き、その詳細な記憶を是非書きとめておきたいと思い、本人の了承を得て、はじめたのが、彼女のライフヒストリーの聞き取りであった。2000年6月以降は、平日1時間～2時間ほど、日々彼女のライフヒストリーを伺った。これは、当初の研究予定にはなかったものであるが、1年以上の長いスパンで、日々ライフヒストリーを聞き取ることができるのは、方法論を再考する上でも、また、カンボジア現代史への1視点を得る上でも、非常に有効であった。シクロー蹴りの調査と彼女へのライフヒストリーを聞き取ることは、相互に補完しあい、双方への聞き取りないようを深めるにも、また調査者としての私の心のバランスをとるにも役にたった。

—その他、生活—

1999年10月～2000年7月までは、知り合いの紹介によって、クメール人ご家族の家に、また、2000年8月以降は、友人となった女学生の家滞在させてもらった。1軒目の家では、実の子のように可愛がっていただき、日常生活のルールや行動について事細かに教えて頂いた。2000年8月以降は、調査後の入力などに集中できるスペースがあり、出入りの自由が比較的きく、女学生の方の家滞在することになった。同世代の友人との同居は、夜ディスカッションをしたり、質問をしたり、勉強の面での刺激もあり、調査を続けるうえで、良い環境であった。2つの家族と生活できたことは、生活習慣を比較し観察することもできよかった。

健康の面では、始めの3ヶ月ほどは、しばしば腹痛に悩まされた。3ヶ月目に高熱、嘔吐、腹痛とすべてを一巡して経験した後は、特に何事もなく過ごすことができた。3ヶ月目の病気は、知らず知らず無理をして活動を行っていたからだと、ホームステイ先の家族からきつく注意をされ、その後は、健康に注意して活動を行った。1年半過ぎた、2001年5月には、アメーバ赤痢になったが、病気よりも、現地で処方された薬によって、薬剤性の肝機能障害になっていることに知らず、活動を継続してしまった。6月に、デング出血熱にかかり、日本で2週間ほど入院した。通常のデング熱よりも重いデング出血熱であったのと、肝機能が非常に低下していたため、完治をまって、1ヶ月という予定外の長い一時帰国になってしまった。調査対象者のシクロー蹴りの方々にも多大な心配をかけてしまったうえ、与えられた貴重な時間を無駄にしまい、健康があつてこそ調査活動が行えるという基本を忘れ活動してしまったことを、反省している。

II 調査研究成果

①シクロー蹴り調査

- ・一時資料として、シクロー蹴りに従事している人々の個人史
- ・副産物として調査法についての再考察
- ・シクロー蹴り従事理由への仮説形成
(詳細、及び、その考察は、修士論文として発表する。)

②ジム・ライさんの個人史聞き取り

- ・一時資料としてジム・ライさんの個人史
- ・ジム・ライさんの語りにあつた今までの歴史研究には取り上げられていない事柄への調査の可能性。
(ジム・ライさんの語りと、カンボジア研究における個人史という方法については、まとめて、何らかのかたちで発表する予定である。)

III 今後の活動予定

2001年10月からは、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程に復学し、今回の調査をもとに、修士論文執筆を行う。修士論文は、シクロー蹴り調査について執筆する。またジム・ライさんの個人史は、女の語りというテーマとして、博士課程における研究活動につなげていく予定である。

IV 2年間の留学を終えて

2年間カンボジアで生活し、調査を行う機会が与えられたことに感謝しています。未熟な私がたてた調査計画が実現し動いていったのは、松下国際財団からの資金援助と、そして、ホームステイ先の家族、友人、先生、なによりも、調査対象者であったシクロー蹴りの方々の協力、クメール語でよく使われた言葉で言えば、「憐れみ」だったと思います。私は本当に未熟な「調査者」で、現場で起こること、聞き取ったことに動揺し、自分の存在をもてあまし、また時には、調子にのってしまうことすらありました。調査といえば、非日常的な響きがしますが、彼らの生活の中、現実の中に登場していることは、大変なことです。いわゆる「貧しい」とされる彼ら、流動性が高い彼らの生活には、日本で中流家庭で学生として生活していた私には、経験したことがないような、早さで、激しさで、変化し、それが日常としてあります。その中に、私も組みこまれていきました。時には、私は病気で、心労で、家に閉じこもってしまったとき、「始めてだよ」と電話をしてきてくれる、家まで様子を見に来てくれたシクロー蹴りの方々のおかげで、調査に戻り、継続していくことができました。この調査から何かが生まれるにするとすれば、彼らの気遣いや優しさからだと思います。お互いのずるさ、弱さ、歯がゆい思い、喜びを共有し、また分かり合えないと思いつつも、関係を続けていくことの大切さを強く感じます。2年間は長かったです。その長さが安易な記述や、自己満足な執筆を妨げ、反面、今論文として、この経験と聞き取り結果をまとめる難しさに直面させられています。なんとか論文として書き上げることが、彼らへのお礼になるとは思いません。「調査者」としてではなく、友人、知人として再会を喜び合える関係を続けていくことが、調査を媒介とした、大切な実であると思います。カンボジアについて論評する顔の見えない研究者ではなく、人間としての交流がまず底辺にある研究者でありたいと思います。彼らがまず自分が何を言ったかどう書かれているか読むことができ、対話を続けていける、そこからまた何かを生み出していけるそうした研究を通して、カンボジアの方々と関係を続けていけることを願っています。

松下国際財団からは、2年間の貴重な時間と機会を与えてくださったことに感謝しています。この結果をだしていくのは、これからですが、良い実となるよう努力していきたいと思います。2年間の援助とご支援本当にありがとうございました。

以上